

親の思い 語り合いましょう

親の心配していること...子ども人間関係でしょうね

- 自分の子どもだけ見て周りが見えなくなってしまう親もいるし、全体に良かれと思って動く親もいる。いろんなことを言う親がいるから、先生も対処が大変だということもわかる。だからと言って多数決をとって、大勢の親が求めていることをやればいいのかと言うと、それもやっぱり違うだろう。学校に450人の子どもがいれば、450の思いがある。「とにかくみんなの思いを聞いてください。聞く耳を持ってください」と言うしかない。「学校はこれをやるどころです、それ以外のことを求められても困ります」と言うのなら、それは私立の学校がやることではないですか。
- 今、それを公立の学校でやろうとしている。
- 選択制とか、特色ある学校づくりとか。
- 先日、新北小で移籍先の希望調査がありました。最初のうちは、新北小の子どもたちはバラバラになるのではないかと言われていたけれど、ここへ来て80%ぐらいは新西小へ行くと言い出した。まだ最終決定ではないけれど。結局、子ども同士のつながりで選んでいる。
- 親として、新しい環境の中でちゃんとうまく適応できるかと考えた時に、前からの友だちがたくさんいた方が安心して馴染めるのではないかと思うのかしら。
- 学校選択の1年目のアンケート調査の結果を見ても、近い地域の学校を選ぶというのと、子どもの友だち関係で選ぶというのが多かったですね。
- 親の思いというのは、多様だというけれど、実際親が心配していることって、それほど違いはない。
- 子ども人間関係でしょうね。学力よりも、先生のいい悪いよりも、子どもが人間関係をつくれるかどうかということでしょうね。
- 学校の中身そのものは、それなりに違うところがあったり、同じだということがあったりというのは、ちょっとは見えてくるけれど、それでわざわざ遠くの学校を選ぶということはないと思う。



- 親の共通する思いとして、子ども人間関係を大事にしようと思っているというのはあるけれど、どんな人間関係を大事にしようと思っているのか、心配の仕方や表現で多様性が出てくるのだと思う。そうだとすれば、その辺を皆で継続して話し合っていれば、「ああしてほしい、こうしてほしい」というバラバラの声でなくて、共有できるものが出てくるのではないかと思う。

言えばきちんと向き合ってくれて、反応が返ってくるという経験が大事

- 一人の子どもの「クリスマス会をやりたい」「学年全部の子、皆で遊びたい」という思いから始まったお楽しみ会の計画を学校に持ち込んだ。先生も「お楽しみ会をやると思っていますから、やりましょう」ということで話が進んだけれど、先生が考えていたの

は、リクレーション。子どもたちが考えていたのは、自分たちがゲームを考えて、クリスマスケーキを作って、司会も自分たちでやって、何もかも自分たちで作るお楽しみ会。親たちは子どもたちが考えるお楽しみ会を実現させてやりたいと思ったけれど、学校の枠の中では難しかった。先生ができる精一杯は、そのリクレーションなんです。それなので、学校外で取り組むことに。4人の子どもたちが実行委員になって、準備を進め、子どもたちの計画をそれに関わる親たちがサポートした。子どもたちはいろいろ考えて、知恵を出して、ペットボトルを使ったボーリングゲームを手づくりして用意したり、会費のことも考えたりして、実に楽しそうに準備をした。会場は町会の会館で。学年60人ちょっといる中で50人参加して、とてもよいお楽しみ会が実現できた。こういうとりくみが今の学校の中ではなかなか実現できない。時間的な余裕もない。



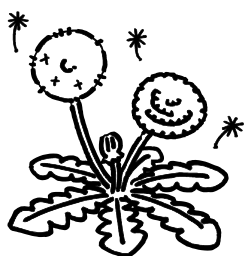
- そういう子どもの自主的な取り組みができる学校であってほしい。子ども会も本来はそういう取り組みをする場だけれど、育成会の親たちが全部お膳立てをしてしまって、子どもたちはお客さんで楽しんで帰るだけになっている。子ども会も本来の活動をすれば、地域での子どもたちの自治の場になるはず。
- 本読みで親たちが学校に入り、名前を覚えられるような関係を子どもたちとつくってきた。「何をやりたい?」と子どもたちに聞いてやり、「～がやりたい」と言うのをやらせてくれるという実体験があるから、また次に「～やりたい」という声が出てくる。言っただけでどうせ聞いてもらえないと思ったら、言っていけない。
- 100%自分たちの思い通りにならなくても、言えばきちんと向き合ってくれて、反応が返ってくるという経験が大事。小学校の児童会、中学校の生徒会での体験でも同じことが言える。
- 昨年のクリスマス会の経験で、子どももやらせればできるんだと私も感じた。やらせなければ、できるわけではない。そのまま中学・高校・大学と進んで、社会に放り出して、できないできないと騒いでいる。
- 子どもが成長したなぁということを知るためには、もっとお母さんが子どもの話を聞いてほしい。学校でこういうことをやったから家でもこういうことをやるようになったというのを実感すれば、もっと学校を信頼できるかもしれない。保護者と先生と子ども、みんな離れている。
- その距離を縮めるためには、その三者で一緒に何かやるという経験が必要なのでは。
- だから、もっと親が学校に入りたい。地域の人も入って…。土曜日に学校に子どもは皆来て、でも授業ではなくて、やりたいことをやるというようなことができないかな。
- 土曜日の学校を使わせてもらって、親や地域の人たちが自主的にそのような活動を始めてしまうという方が、いろんな制約がないのではないかな。東部子どもまつりや小金原子どもまつりは、毎月1回土曜日学校の体育館を借りて開催している。

松戸市次世代育成支援行動計画素案の中に、『小学校における居場所づくり』という施策が上げられています。その中身は、「放課後や学校の休業日に、小学生が学年をこえて楽しみながら学んだり、遊んだりできるようにするため、教師のOBや地域のボランティアなどの協力を得て、子どもの居場所づくりを進める」というもの。

- 最初は大人たちの出番が多くても、そのうち子どもたちの様子を見ながら引いていく。最終的には子どもたちだけで運営できるようにしていく。
- 子どもたちがやりたいのであれば、野球でも、サッカーでも、ドッジボールでも本読みでも、何でもいい。

日常的な関わりの積み重ねがないと、信頼関係を作っていくのは無理

- 先ほどのクリスマス会のお知らせは担任の先生を通して配ってもらったし、出欠も取ってもらった。学校行事ではないということを明記した上だけれど。学校って親が入って嫌がるのは、あらさがしをして外で言われることでしょうか。以前から本読みなどで親が学校へ入って行って、それをしないという信頼関係ができたから、そういうことができたのだと思う。信頼関係をつくっておいて良かったなあとと思う。
- 最初に学校へ入っていったのは？
- 最初は3人の親が、読み聞かせをしたいと校長に話しに行き、「担任の先生にもよるから、入れるクラスから入ってください」と言われた。反対ではないけれど、校長から担任の先生に話をしてくれるという感じではなかった。こそっと入って行って、大丈夫そうだという感触を得て、だんだん広まっていった。それと平行して、「PTAのない学校でもせめて広報誌だけでも出させてほしい。先生の顔もわかりませんから」と頼んだ。「誰がやるんですか？」と言われ、「私がやります」と手を上げた。私がやると言ったら、何人かの人が集まってくれた。
- 先生方と直接会って、話して、という日常的な関わりの積み重ねがないと、信頼関係を作っていくのは無理よね。
- 使われていると感じるほど、しょっちゅう親が学校にかりだされる。
- 迷惑だと思って出てくるか、様子を見ることができているか、人それぞれ。何か母体があれば意見のいいようもあるけれど。
- 母体があっても意見交換はない。
- PTAのない学校にいる者としては、PTAのあるところに言いたい。どんなに恵まれているかわかっているのかって。
- PTAがあっても、会員は学校にお任せの気分。委員をやる人はいつも決まっている。本来のPTAって何をするとどこか皆知らない。学校のお手伝いをするところだと思っている。だから面倒くさいと思ってしまう。総会で意見を言っても、その場で×。役員会に持って行って話し合ってもくれないの？と思ってしまった。
- 総会で意見を言うと、会長がその場で答えて終わりではなくていいのに、一問一答のように会長が答弁して終わりになってしまう。本当は、提起された問題に対して、その場にいる人で意見交換すればいいのに、それが無い。



- PTAがあるからコミュニケーションを取れるのではなくて、人と話し合うことや、一緒に何かをやることで自分自身も体験を積みながらいろんなことを学べるんだとか、コミュニケーションを積み重ねて信頼関係ができてそれが自分自身にとって居心地のいい場をつくることのできるんだとか、そういう思いをみんなが持ってなければ、PTAがあろうが、何があろうが同じことだ。
- 子どもだけでなく、大人も自分が主体になって何かを作り出して

く経験が圧倒的に少ない。日常的な取り組みがとても大切ですね。

- 常盤平幼稚園のPTAには会長がない。全員が関われるようにということで全員がお世話係。月2回全員が集まれる場を作っている。連絡会と月例会がある。その際の進行はクラスで持ち回りです。
- PTAというのは、学校や幼稚園が作ってくださいというものではなく、親が先生にも一緒につきりませんかと誘いかけてつくるもの。

私たちは先生と一緒に子どもを育てようと思っている



- あるクラスで、ちょっと一歩か二歩人より遅い子がいるのだが、その子を担任の先生がクラスから排除してしまった。いじめがあって、そのいじめを先生一人で解決できなくてそのような問題が起きた。クラスの中で問題が起きて、先生がこんな問題があるのだと保護者にオープンにしていけないと、先生が一人で抱え込んで、結局抱えきれずに疑問の残るような解決の仕方をしてしまう場合がある。オープンにしないと、クラスの親の間でも理解に温度差が出てしまう。知っている親は知っているし、知らない親はまったく知らない。人よりちょっと遅い子をクラスの友だちが手伝おうとするのを「もういいわよ」と止めてしまったら、そこで人間関係が切れてしまう。せっかく思いやりや助け合いという、人間関係の基本のところを全部シャットアウトしてしまう。どうしたらいいか、皆で話し合おうとしても、なかなかうまくいかない。
- 私たちは先生と一緒に子どもを育てようと思っているのだから、先生も育ててほしい。先生にも気づいてほしいの。この状況は先生にとっても子どもにとってもラッキーじゃないということ。
- 何か言いたいことがあった時に、PTA総会があれば聞いてくれなくても、みんなが集まる場所があって、そこで言うことができる。
- PTAというのは、本来クラスPTAから始まっていくから、クラスで何人か集まってそこから変えていくこともできる。
- 親にとっていい先生だと思ったのは、全部入れてくれる先生。問題を抱えている子どもをクラスの中でどう受け入れていくかに心を砕き、子どもたちに話をしてくれた先生。
- 一人一人をきちんと見てくれる。受け止めてくれる。
- 子どものいいところと悪いところというのは表裏一体。それをちゃんと見て、子どもがプラスのほうにいろいろなことを表現できるように見てくれる先生っていいと思う。子どもを深く見てくれているなぁと思う。
- 学校から「学校に何を求めますか」というアンケートが来ることがあるけれど、どうしても批判的なことを書いてしまいがち。
- アンケートは一方的だから。顔をつき合わせて話し合えば、違う見方をすればこうなんだとわかってくると、批判だけだったのがもう少し客観的に評価できるようになる。
- 親の思いが知りたかったら、アンケートではなく、聞き取り調査をすればいいのにね。(いろんな親たちと一緒に話し合えばいいのにね)